

Title	夏目漱石『こころ』考：キリスト者はどう読むかという問題の前提として
Author(s)	黒木, 章
Citation	キリスト教と諸学：論集, Volume17, 2001.12：148-164
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3208
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

夏目漱石『こころ』考

——キリスト者はどう読むかという問題の前提として——

黒 木 章

はじめに

『こころ』は、漱石作品の中でも特に多くの日本人に読まれ続けてきた小説である。戦前の事情は審らかにしないが、戦後は多くの高等学校国語教材に使われてきたこともあって、殆どの成人が一度は読んだことがあるだろう。各文芸出版社が競って文庫本化し、しかもその稼ぎ頭が常に『こころ』だというのも定説化している。例えば新潮文庫だけでも昭和二十七年の初刷りから今日まで約五五〇万部売れているという。同じく高校の国語教材に使われる森鷗外の『舞姫』（新潮文庫本は『舞姫』と『阿部一族』を収めている）と比較するとその発行部数の差は歴然としている。因みに『阿部一族』は『興津弥五右衛門の遺書』に続いて鷗外が乃木希典の殉死事件に反応して書いたものであり、『こころ』も乃木事件を物語展開の重要な場面に使っているのだが、この余りにも大きな読者数の差は何を意味するのだろうか。またなぜこれほど多くの日本人が『こころ』を読み続けるのだろうか。

この小説は、主人公の「私」が書いた手記という体裁になっている。「私は淋しい人間です」(《上七、十四》)と語りまた「私は倫理的に生れた男です」(《下二》)と書いた先生と先生の謎に迫ろうとする大学生の「私」とが実際に交流したのは三年半程度の時間であるが、この交流の中で結果として作品の構造のみならず読者の態度をも縛るやり取りがなされている。それは、(先生)「あなたは私の思想とか意見とかいふものと、私の過去とを、ごちやごちやに考へてゐるんぢやありませんか」、(私)「先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです」、(先生)「あなたは大胆だ」、(私)「ただ真面目なんです。真面目に人生から教訓を受けたいのです」、(先生)「あなたは本当に真面目なですか」「私は過去の因果で、人を疑りつけてゐる。だから実はあなたも疑つてゐる。然し何うもあなた丈は疑りたくない。あなたは疑るには余りに単純すぎる様だ。私は死ぬ前にたつた一人で好いから、他を信用して死にたいと思つてゐる。あなたは其たつた一人になれますか。なつて呉れますか。あなたは腹の底から真面目ですか」、(私)「もし私の命が真面目なものなら、私の今いつた事も真面目です」というやり取りであり、この場面の最後で先生が「よろしい」「話ませう。私の過去を残らず、あなたに話して上げませう」(《上三十一》)と約束したことがあるが、それをうけて後に(長くても半年は経つていない)先生が「私」に遺書を送り届ける。その冒頭には「此手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもう此世には居ないでせう。とくに死んでゐるでせう」(《中十八》)とあり、続いて「私は書きたいのです。義務は別として私の過去を書きたいのです……私は何千萬とゐる日本人のうちで、ただ貴方丈に、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと云つたから……私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上げます……その中から貴方の参考になるものを御攫みなさい……是から發達しやうといふ貴方には幾分か参考になるだらうと思ふのです」、また「あなたは私の過去を絵巻物のやうに、あなたの前に展開して呉れと逼つた。私は其時

心のうちで、始めて貴方を尊敬した……私の心臓を立ち割つて、温かく流れる血潮を啜らうとしたからです……私は今自分で自分の心臓を破つて、其血をあなたの顔に浴せかけやうとしてゐるのです。わたしの鼓動が停つた時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です」《下二》とその尋常ならざる覚悟を説明している——これは漱石が前に書いた激しい調子の書簡「僕は世の中を一大修羅場と心得てゐる。さうして其内に立つて華々しく打死をするか敵を降参させるかどつちにかして見たいと思つてゐる……世の中は僕一人の手でどうもなり様はない。ないからして僕は打死をする覚悟である。打死をしても自分が天分を尽して死んだといふ慰藉があればそれで結構である……尤も烈しい世の中に立つて……どの位人が自分の感化をうけて、どの位自分が社会的分子となつて未来の青年の肉や血となつて生存し得るかをためして見たい」(明治三十九年十月二三日 狩野亮吉宛) とか「僕は一面に於て俳諧的文学に入入りすると同時に一面に於て死ぬか生きるか、命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文学をやつてみたい」(明治三十九年十月二六日 鈴木三重吉宛) などを想起させるが、漱石文学の重要な一面がこの小説に現れるといえよう——。そして先生の遺書を受け取つたその時からさらに数年後(これも二年以内だろう)に「私」が先生の遺書を含む手記を書いたという形になっている(「私」が回想する物語の時間と手記を書いている現在時間との差には注意しなければならぬ。なぜならこの時間差をどう考えるかで作品読解が違つてしまうからである——この点は後に述べる)。

物語の中で主人公の「私」が先生に要請されたように、この小説の読者もまた自分が作者・漱石に「真面目」な人間であることを求められていてと考えて読むはずである。この小説が誠に多くの日本人に読まれ続けてきたという事実は、多くの日本人が「真面目」だった或いは「真面目」であろうとしたのだということを示している。しかし、これほど多くの日本人が示し続けてきた「真面目」とは一体どんなものなのか。作品内部の問題とともに

読者の側のそれとしても興味がある。

わたくしもまた作中人物や多くの読者たちがそうであったように——それは作者・漱石の要請でもあるはずだから——素朴に「真面目」に読んでみたい。そしてこの小説に描かれるエゴイズムと愛の問題を論じる前提として幾つかに絞って考察してみようと思う。ただ、この小論が一般的な文学研究論文のスタイルとはやや異なるだろうことは予め断っておきたい。

—

わたくしは、先生の自殺を描く『こころ』は作者・漱石による壮絶な殺人劇であるという読み方をしている。だが、考察を進める前に少し脇道にはいつてみたい。

漱石は、大正三年四月二〇日から「先生の遺書」という題で朝日新聞に連載を始めた（この題名は、明治天皇の大葬の儀があつた大正元年九月一三日の乃木大将夫妻の殉死事件を受けて鷗外が連載中の『雁』を中断して——理由は、『雁』と『灰燼』を平行して書き進めていた鷗外の『雁』における方法上の行き詰まりにもあるが、それは別として——急遽『興津弥五右衛門の遺書』を十月の中央公論に載せたことを意識してつけられたものであろう）。先に漱石の『三四郎』に刺激されて鷗外が『青年』を書いたのとは逆で、二人は誠に良きライバルであろうとしたことがわかる）が、一〇〇回を超えてもなかなか終わることができなかったのが八月一日の第百十回でこの連載を打ち切った。そして九月に「上 先生と私」「中 両親と私」「下 先生と遺書」という三部構成の単行本として岩波書店から刊行したのである。創業したばかりの小出版社岩波の負担を案じてか、漱石は（わたくしどもには

岩波版『漱石全集』で馴染みになって例の唐草模様を表紙にするなど）装丁も自から行つて殆ど自費出版のよ
うな形で出版したものだと言われている。

漱石はこのとき広告文を書いている。「自己」の心を捕へんと欲する人々に、人間の心を捕へ得たる此作物を奨む」というのがそれだ。この短い広告文にみえる作家・漱石のセンスには感心させられる。なぜなら、この広告文は当時の人々の読書欲をそそののに十分の効果を發揮したと思われるからである。即ち、日本の歴史でも誠に特異というべき明治という時代を懸命に且つ前のめりになって生きてきた多くの人々が明治四五年七月の天皇崩御によって突然時代の終焉を迎えたことを思い知らされ、時代の意味とともに自分の生きて来し方を振り返つてその意味を確認せざるをえない——そのような状況にあつた人々の心にこの広告文は強く訴えたと思われる。もつという、人々は日清戦争や日露戦争を経て曲りなりにも世界列強の仲間入りを果たし諸種の近代化にも成功したという民族的高揚感・達成感を味わう一方で特に日露戦争後に露となつた国家と個人をめぐる諸矛盾、例えば大逆事件が象徴したような矛盾に決着がつけられていないと感じていたと思われ、また個人的な問題としてもここまで辛うじて抑封してきた心の悔き或いは「うしろめたさ」の感覚を抱え込んだままであることに気付かせられていたと思われるからである。後者についていうと、それは、身分や土地に縛られ「忠」と「孝」を規範とした徳川封建の生き方を脱して才覚と能力を武器に競争に勝ち抜くことを奨励されて個人の自立と幸福の追求はそのまま国家の幸福と近代化に繋がるのだと夢見て懸命に駆け抜けてきた人々が人生の整理期を迎えて抱え込まざるをえなかつた心の悔き或いは「うしろめたさ」の感覚である（明治四四年八月の漱石の講演「現代日本の開化」に従えば、西欧社会が三百年費やした近代化を僅か五〇年で達成しようとして「上滑りに滑つてきた」結果の全国民的消化不良と神経衰弱の自覚症状にも重なるう）。

「官武一途庶民ニ至ル迄其志ヲ遂ゲ」云々という五箇条の御誓文とともに始まる明治という時代は、多くの人々にとつて確かに自らの生を自ら演じることのできる望ましい舞台の幕開けであつた。『西国立志篇』や『学問のすゝめ』に煽られて財能ある青年は古い家を離れて東京の大学に進んだ（『こころ』の先生と青年「私」はこの余波を受けた先輩と後輩としては典型的人物として設定されている）。財能がなくても強靱な肉体に恵まれた地方の次男・三男たちは労働者となつて都市に集中した（近代化の一つの特徴として人口の移動・都市集中を挙げたのはテンニースの『ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ』であつたことが思い出される）。ともに立身出世願望を秘めた幸福追求であるとはいへ、日本では未曾有の人口大移動となつた。そして成功した或る者は官吏や実業家となり、垢抜けした女を妻にして都会に家庭を作つた。失敗した或る者は帰郷して笑ひ者にされ、あげくには満州に夢を追うこともした。しかし、懸命に生きてきた己の人生の意味付けを問うるとき、彼らが捨てた故郷には両親——子供に見捨てられ、いまや老境を迎えて片方の死後にたつた一人で残されるであろうもう一方の将来を切実に心配しなければならぬ不安と寂しさに耐えて生きている——そのような両親を捨ててきた者の罪責感、競争社会ゆえに避けられなかつた友人・同僚への裏切り意識、異質な環境に育つた男と女とが都会で作つた家庭における愛の不充足感……時代の終焉に直面させられて自らの生の意味付けを問うとした多くの人々が気付かされた心の悔き或いは「うしろめたさ」の感覚と孤独感とはこのようなものであつた。そして乃木の殉死事件は多くの人々のこのような感覚を鋭く衝くものであつたから、人々は一層慌てて時代と己の生についてその意味付けを問うなければならぬ状況にいたと考えられる。単行本『こころ』の刊行にあつた漱石が付した短い広告文が人々の心に訴えてその読書欲をそそののに十分効果的であつたはずだといふのはこういうことだ。

「こころ」は「裏切りとその罪の贖いの物語」だと規定する人が多い。近代日本人の、否、明治的人間のエゴイ

ズムの問題を扱っていてその主題は明瞭である。先に述べたように、自らの心に悔き或いは「うしろめたさ」を感じつつまた孤独を覚えつつこの小説を読もうとした最初の人々は、意識的には自らを選良であり「真面目」であると考えていたであろう。また、その後も驚くべき数の人々がこの小説を読み続けてきたということは、近現代の日本人にとってはこれが「真面目」に取り組まれるべき根深い問題であり続けたということを示すはずだ。

二

明治三八年の『吾輩は猫である』以来、漱石がその小説に通底させてきたテーマは「自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々」の生き方の問題である。それは「こころ」でも変わらない。否、「こころ」ではエゴイズムの問題が物語としての肉付けや結構を欠いたまま余りに性急に提示されているのではないかと思わせるほどである。

例えば、主人公の「私」は明治四五年六月に東京大学を卒業して重篤な病状にある父と母がいる故郷に帰る。彼はその生の場を故郷に求めているわけではない。彼の帰郷は、卒業後に有利な就職を獲得するまでのモラトリアムで自由な時間を利用して暫く父の世話をしたいというだけのことである。この時の彼は、自分の幸福追求の場は東京にあると本心から思っている。父の世話をしながら或いは父に同情しながらも「広い都を根拠地として考へてゐる私」《中六》とか「学問をした結果兄は今遠国にゐた。教育を受けた因果で、私は又東京に住む覚悟を固くした」《中七》といっている。だから、「卒業が出来てまあ結構だ」と喜び村人を招いて卒業祝いをしようと言う父の「無知から出る田舎臭い所に不快を感じ」、父を軽蔑する。しかし、そのような彼の反発を受け止めながら父が「つまり、おれが結構といふ事になるのさ。おれは御前の知つてゐる通りの病氣だらう。去年の冬御前に会つた時、こと

によるともう三月か四月位なものだらうと思つてゐたのさ……そこへ御前が卒業して呉れた。だから嬉しいのさ。折角丹精した息子が、自分の居なくなつた後で卒業してくるよりも、丈夫なうちに学校を出てくれる方が親の身になれば嬉しいだらうぢやないか。大きな考を有つてゐる御前から見たら、高が大学を卒業した位で、結構だ結構だと云はれるのは余り面白くもないだらう。然しおれの方から見て御覧、立場が少し違つてゐるよ」と諭すと、たちまち自分の軽薄さを恥じて「私は一言もなかつた。詫まる以上に恐縮して俯向いてゐた。父は平氣なうちに自分の死を覚悟してゐたものと見える……私は全く愚ものであつた」「父や母に対して少しも逆らふ氣が起らなかつた」「《中一》と態度を改め、また「小供に学問をさせるのも、好し悪しだね。折角修業をさせると、其小供は決して宅へ歸つて来ない。是ぢや手もなく親子を隔離するために学問させるやうなものだ」《中七》と言う父の愚痴は不合理はでないと考えたり、或いは「私は急に父が居なくなつて母一人が取り残された時の、古い広い田舎家を想像して見た。此家から父一人を引き去つた後は、其俣で立ち行くだらうか。兄は何うするだらうか……さう考へる私は又此所の土を離れて、東京で氣楽に暮らして行けるだらうか」《中二》とか「父は死後の事を考へてゐるらしかつた。少くとも自分が居なくなつた後のわが家を想像して見るらしかつた……永年住み古した田舎家の中に、たつた一人取り残されさうな母を描き出す父の想像はもとより淋しいに違ひなかつた」《中七》などと考え、さらには「それ程仲の好い兄弟ではなかつた」という兄と同じ蚊帳の中に寝ながら「それでも久し振りに斯う落ち合つてみると、兄弟の優しい心持が何処からか自然に湧いて出た。場合が場合なのもその大きな原因になつてゐた」《中十四》というように、肉親の情愛を肯定的に捉えて利己的幸福追求の裏側にある問題に気付くほどにいわば成長してゐたはずだが、彼はやはり「なるべく父の機嫌に逆らはずに、田舎を出やうと」《中八》考へてゐる。その上で作者・漱石は、「此手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもう此世には居ないでせう。とくに死んでゐるでせう」

という先生の手紙の冒頭部分を読んだ途端に「私」をして「其時私の知らうとするのは、ただ先生の安否だけであつた。先生の過去、かつて先生が私に話さうと約束した薄暗いその過去、そんなものは私に取つて、全く無用であつた」《中十八》と言わせ、死の迫っている父親を見捨てて列車に飛び乗らせる。先に触れたように、「私」は「先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです」と語っていたことを考えると、このような展開はやや性急で肉付け不足であろう。物語展開上の肉付け不足は他にもある。例えば、先生の遺書を受け取つてから「私」がこの手記を書くまでに（随分色々の経験をして思考の上でも精神的にも成長しているらしいのだが、時間的には二年程度である。ところが手記の書き方を見ると、ときどき「私」と作者・漱石とが重なり読者は四五歳を過ぎた漱石の肉声に触れるように感じることがある）どの位の時間が経っているのか——「子供でもあると好いんですがね」という先生の奥さんの言葉に「何の同情も起らなかつた。子供を持つた事のない其時の私は、子供をただ蒼蠅いもののように考へてゐた」《上八》とあるのを見ると、いまは子供がいると暗に言っているようにも読めるが——判然としない。さらに（これもよく指摘されてきたことではあるが）例えば、先生の遺書に「私は妻を残して行きます……妻に血の色を見せないで死ぬ積です……妻から頓死したと思はれたのです……私は私の過去を善悪ともに他の参考に供する積です。然し妻だけはたつた一人の例外だと承知して下さい……私が死んだ後でも、妻が生きてゐる以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、凡てを腹の中に仕舞つて置いて下さい」《下五十六》と念押しされていたのにも拘らず、いま「私」が手記を書けるのは奥さんも既に死んでしまつてゐるからなのかと疑わせるような展開にもなつてゐる（わたくしは奥さんが死んでしまつてゐるとは考えない。これをどう考えるかはこの小説読の一要件である）。このように、推理小説的謎解きの手法に面白さがあるとはいへ、漱石にしては緻密さを欠く書き方になつてゐると言わざるをえないところは多い。

物語展開の肉付けを欠くほどの性急さを見せながら、ともあれ漱石が描こうとしたのは彼の一貫したテーマ「自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々」の生き方とその結果として避けられない孤独感・淋しさをどう克服するかということであり、殊に『こころ』の場合は明治的人間のエゴイズムの問題を剔抉することであった。

漱石は——問題を簡明な形で提示するためだろうが——、この物語に最も世にありふれた男女の恋愛をめぐる三角関係を設定した。その三角関係のトラブルの中で先生の友人を自殺させた。そして肝心の先生自身をも自殺させた。

事柄の渦中にある当事者が「真面目」であればあるほど彼は当面の問題を正確に捉え難いといわれる。またエゴに囚われて深刻な失敗を味わった者には、たとえそれが過ちであったと解つていてもあつたことをなかつたことにすることはできない。精神科医がよく言うように、当事者がそのトラウマから自力のみで脱却するのは難しい。或るキリスト教の神学者は、水に溺れかけている人が自分を救おうとして自分の手で髪をひっぱり上げても助かることはできないと説明した。物語においてエゴイズムをめぐる深刻な失敗を経験する人物の苦悩を挟り且つそれが現代人の根深い問題であることを示すには、事態を内と外の両面から見ることでできる人物が必要なわけで、主人公の「私」が造型される一半の理由はここにあるだろう。

だが、「私」の造型はこの物語の構造上の必然であると共に作者による巧みな仕掛けなのだということも見抜かねばならない。つまり、漱石は「自由と独立と己れとに充ちた」はずの明治的人間の問題をいわば総体として捉えるために、まず自から「最も強く明治の影響を受けた」《下五十五》という先生のエゴイズムをめぐる過去の経験とそこから生まれた人間についての認識及びその生き方とを問題にする。次に「自分で自分が信用出来ない……自分を呪ふより外に仕方がない」と言う先生に「真面目に人生から教訓を受けたい」「先生の過去が生み出した思想

だから、私は重きを置くのです」《上三十一》と迫った「私」に宛ててその人生の総決算である遺書を書かせる。そして遺書を受け取った「私」に先生の生き方を反芻する手記を書かせることで明治的人間のエゴイズムの問題と罪を確認させて、現代日本人の生き方を探求させるという方法を取っている。だからこの小説には三つの時間が設定される。前後関係でいえば、第一は遺書の中に描かれる先生固有の過去の時間、第二は大学生の「私1」が先生と交流し共有できた数年前の約三年半の時間、第三は先生の遺書を受け取った後にこれら二つの時間を反芻しつつ手記を書いている「私2」の今のこの時間である（論の展開上主人公「私」を「私1」「私2」というように区別して記す。煩雑を承知しているが、了とされたい）。だが、物語では第三の時間が最初に示されて、続いて第二第一の時間が示される形になっている。これは推理小説的展開というより、読者を巻き込むための作者の仕掛けだといふべきだろう。つまり、これは先の二つの時間を反芻しつつ手記を綴る「私2」の書く行為——それは先生のエゴイズムと死の問題に関わって遺書を届けられた「私1」がその数年後に先生の問題を対象化しそこから教訓を得つつ自身の生き方を探求する「私2」の行為だ——が、実は「私2」が書く先生夫妻の生活の現実には入り込み、さらに先生の遺書を読みながら「私2」と共に「真面目」に自己の生を探求しようとする多くの人々の読書行為に重なるという仕掛けになっているのだ。作者は読者をこの仕掛けに嵌めるために「真面目」さを求め、また物語の登場人物たちの固有名詞を奪って読者が人物たちを任意に代置できるようにしたが、それは「私2」の書く行為と読者の読む行為とを同じ境位に立たせようとしたからである。その「真面目」さのゆえに多くの読者が作者の仕掛けに嵌った。だから、無論、作者の仕掛けは成功したといえるのだ。

だが、ここでは「真面目」な読者の素朴さについて批判することは止めよう。このことに触れたわたくしの意図は、単行本『こころ』を刊行するときに漱石の書いた広告文が当時の多くの「真面目」な人々の心に訴えて如何に

その読書欲を誘ったかということと読者を巻き込む物語構成上の仕掛けが作者の稀有な才能によっていることを指摘して、その上でなぜこの小説が驚くべき数の日本人に読み続けられてきたかという秘密の一端を明らかにすることができれば十分なのである。

三

小説内部の構造と人物の設定はどうなっているか、或いは「私」はなぜ手記を書くのかまた書けるのかということについて多くの読者は気にしないが、案外重要な問題である。

注意して読むと、手記の書き初めから主人公の「私2」は、先生と交流し故郷の父の世話をしていた彼自身の過去即ち「私1」の時間と「私2」の時間とを区別しながら、いま自分が手記を書いているのだということを強く意識しそのことを示そうとしていることがわかる。例えば、周知のように冒頭部分で「私は其人を常に先生と呼んでゐた。だから此所でもただ先生と書く文で本名は打ち明けない。是は世間を憚る遠慮といふよりも、其方が私にとって自然だからである。私は其人の記憶を呼び起こすごとに、すぐ『先生』と云ひたくなる。筆を執つても心持は同じである」《上1》と書いていることからその区別の意識が覗ける。「私は若かつた……私は何故先生に対して丈斯んな気持が起るのか解らなかつた。それが先生の亡くなつた今日になつて、始めて解つて来た」《上4》、「経験のない当時の私は、この予言の中に含まれてゐる明白な意義さへ了解し得なかつた」《上8》、「子供でもあると好いんですがね」と奥さんは私の方を向いて云つた……私の心には何の同情も起らなかつた。子供を持つた事のない其時の私は、子供をただ蒼蠅いもののように考へてゐた……『子供は何時迄経つても出来つこないよ』と先

生が云つた。奥さんは黙つてゐた」《上八》、「其時の私は既に大学生であつた。始めて先生の宅へ来た頃から見るとずつと成人した氣であつた」《上十一》、「先生は美くしい恋愛の裏に、恐ろしい悲劇を持つてゐた。さうして其悲劇の何んなに先生に取つて見慘なものであるかは相手の奥さんに丸で知られてゐなかつた。奥さんは今でもそれを知らずにゐる。先生はそれを奥さんに隠して死んだ……私は今此悲劇に就いて何事も語らない」《上十二》、「私は其晩の事を記憶のうちから抜き抜いて此所へ詳しく書いた。是は書く丈の必要があるから書いたのだが」《上二十》などは「私2」が「私1」を想起しつつ綴つてゐるのだと時間の区別を示そうとしてゐることが分かる書き方になつてゐる。そして「私は若々しいと云はれても、馬鹿氣であると思はれても、それを見越した自分の直覺をとにかく頼もしく又嬉しく思つてゐる。人間を愛し得る人、愛せずにはゐられない人、それでゐて自分の懐に入らうとするものを、手をひろげて抱き締める事の出来ない人、——是が先生であつた」《上六》とか「私は思想上の問題に就いて、大いなる利益を先生から受けた事を自白する」《上三十一》という部分は、当時の「私1」と手記を書いている「私2」との間に距離を作つて、「私2」が事柄を捉え直しながら併せて先生の生がどのようなものであつたと現在考へてゐるかという「私2」の認識を書き込んでゐることがわかる。これは、反芻しつつ書いている「私2」に「私1」と先生の生と死とを対象化してそれを批判し得る目が生まれてきてゐることを示すものだと見てよいだろう。

わたくしは事柄を対象化し彼我との間に距離を作つて客観的・批判的に捉えるその認識がことばを表象するといふ言語論の初歩的な定義を逆から言つてゐるに過ぎないのかもしれない。そうであるとしても、問題は手記を書く「私2」に何が見えてゐるのかということではなからぬ。ところがこれが必ずしも明確ではない。「私2」はもちろん作者もこのことを書いてくれてはいない。しかし、先に述べたように先生はその自殺を「私は妻には何も

知らせてくれないのです……妻が生きてゐる以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、凡てを腹の中に仕舞つて置いて下さい」と書き送っていたのだから、奥さんが死んだとは思えない状況でいま手記を書く「私2」には「真面目」な先生の生と自殺による自己完結ぶりを批判的に捉え且つ先生の自殺を知ることになるだろう奥さんの驚きと愛の絶望・苦悩をも凌駕できる何かが見据えられようとしているはずだということは言えるのではないか。

考えてみれば、先生と「私1」とは時間差をもつて生まれた双生児ほどに似ていた（「同性愛的な関係」という論者もいるが、わたくしはこういう論には組みしない）。例えば、「私1」が鎌倉の海水浴場で初めて出会った先生を「どうも何処で見た事がある顔の様に思はれてならなかつた」《上二》というのは精神医学でいう「既視感」に依るのだと説明する人もある。だから、無論、先生と「私1」とには共通性がある。知識を武器にした実力で自らの幸福を追求しようとして故郷（共に地方地主の息子である）を捨てた、東京の大学に入った、自己の経験に思想の基盤を置く倫理的な「真面目」さを持つ、（経験は異質だが）寂寥感を抱え「はかない」人間観を持つ——こういう点で二人は共通している。一方、先輩である先生と後輩の「私」とには確かな差異もある。先生は故郷（血縁）を憎悪するが「私1」はそうではない（先に述べたように故郷脱出を願いながら血縁の情愛は未分のままである——先生の遺書を手に列車に飛び乗ったが、その後東京に住んでいるのか帰郷したのか不明である）、先生は強い挫折感を抱えているが「私1」は未だ深刻に挫折した経験を持つてはいない、先生は「恋は罪悪で神聖なもの」だという既婚者だが「私1」は「黒い長い髪で縛られた時の心持」を知らない恋の未経験者である（「私2」は未婚者か既婚者か判然としない）、先生は自己嫌悪と罪責感・孤独感に苛まれながらも「死ぬ前にたつた一人で好いから、他を信用して死にたいと思つてゐる」が「私1」は先生に生きた教訓を与えられたいと近づく（先生はこれを青春

特有の「淋しみ」、「目的物を探して動く」恋の欲求と同類のものと警戒してみせる）を抱えている、先生は自ら「最も強く明治の影響を受け」た者が「明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたやうな気がして、（天皇の崩御した）其後に生き残つてゐるのは畢竟時勢遅れだ」として「明治の精神に殉死する積」で自殺するが「私」は先生の言つた「明治の精神に殉死する」とはどういうことかを考え続け先生の生と死を踏まえて自己を含む人間一般の生の意味を探索する（許された紙数で論じることができないので結論だけいうと、わたくしは先生のいう「明治の精神」とは「自由と独立と己」とに充ちた現代に生れた我々」の精神即ち己の幸福を追求して競争に打ち勝とうとする利己的精神のことであると考へている）——こういう点が異なっている。

このやうな先生と「私」の類似性と差異性を持ちながら、深刻な挫折感と人間不信から脱却できない先生にとつて「私」は少なくとも出合いの初めは先生を脅かすもの・不安な他者であつた。しかし、過去を妻にも明かさないう先生がその命と引き換えに「ただ貴方丈に、私の過去を物語たいのです」「その中から貴方の参考になるものを御攫みなさい」「是から發達しやうといふ貴方には幾分か参考になるだらうと思ふのです」という理由は、「私」が「真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと云つたから」なのだと説明され、また「あなたは私の過去を絵巻物のやうに、あなたの前に展開して呉れと逼つた。私は其時心のうちで、始めて貴方を尊敬した」「私の心臓を立ち割つて、温かく流れる血潮を嚙らうとしたからです」「私は今自分で自分の心臓を破つて、其血をあなたの顔に浴びせかけやうとしてゐるのです。私の鼓動が停つた時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です」と期待されるからなのだと説明されることで一応の辻褃あわせができたことにはなつてゐる。だが、これで「私」は何千萬とゐる日本人のうちで「たった一人の信用できる人として先生に選ばれたことを喜び満足できるのだろうか。否、先生の過去が明らかにする人間の罪はこれで贖われるのだろうか。財産横領

とそれを誤魔化そうとして愛を感じない従妹との結婚を企む叔父の裏切りが人間不信の始まりであってそれは辛くとも相手を憎悪すれば片がつく他者不信のレベルに留まっていたのだという意味のことを言う先生が、三角関係の恋愛を巡って自ら弄した卑怯な利己心に発する策略ゆえに友人を自殺に追い込んだとして自責する自己不信の状況と罪責感・孤独感は確かに深刻なものである。遂には自ら死を選ぶ人間の罪の物語としても迫力に満ちている。しかし、その結果としての先生の自殺を遺書として見せつけられることになる「私」は何を「教訓」として受け取ればよいのだろうか。或いは先生の過去の秘密を知らされないままの奥さんはどうすればよいのだろうか。少くとも先生の死を知ったときの「私1」と先生の奥さんはそれぞれに先生の生と死の事実を抱え込んで佇むしかなかったのではないかと思われる。

この小説には先生の自殺を初めとして実に多くの死が描かれる。だが、これらの死に対してキリスト教でいう罪からの救済や復活を期待することはできない。先生がその遺書で願っているという「私」の「胸に新しい命が宿る」とは、「私」が先生の生と死の事実を踏まえて生きるということだろうが、それを以て先生の復活とか救済ということとはできない。清水汎氏が言ったように（『漱石の悲劇』一九八二 聖文舎）、精々「私」における先生の罪の輪廻的「宿り」になるだけではないのか。平板なものにすれば、「自由と独立と己」とに充ちた現代に生れた我々の後輩である「私」が先生の失敗を教訓としてそれを繰り返さないように注意して倫理的に「真面目」に生きるという用心深さを教えるだけのことではないのか。

明治期の最高級の英文学徒としてキリスト教を深く学んだ漱石ではあるが、彼はキリスト教を信仰者の視点では扱わなかった。自己本位を標榜する彼が取り組んだのは禅である。小説で人間の罪の問題を探究する際にも彼はそれを禅の世界に持ち込みそこで格闘した（その典型が『門』であり『行人』である。対人不信と孤独に囚われてい

る『行人』の主人公は夫婦間の溝を埋めるにも自ら「氣狂いになるか、自殺するかそれとも宗教の世界にはいるか」というこの三つのうちの一つしか方法はないと苦しむ大学教師であった。だから、例えば金貸しの老婆とその娘を殺して罪に戦くラスコーリニコフにラザロの復活の場面（ヨハネ福音書第二一章）を読み聞かす売春婦ソーニヤ、そしてシベリア行きを共にするこの男女の物語を書くドストエフスキーの『罪と罰』を漱石に期待するのは見当違いではあるだろう。だが、明治的人間のエゴイズムを抉って「自由と独立と己とに充ちた現代」の人間である先生の罪と自殺を描く漱石の『こころ』でも少なくとも手記を書く主人公「私2」がその先に見据えなければならないものがあるとすれば、それは確かに「すべて重荷を負うて苦しむ者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」（マタイ福音書二二章二八節）と呼びかける神に関わる問題或いは人間を死の棘即ち罪から解放つ何ものかでないならばならなかつたはずだといえるのではないか。

蛇足を加えておこう。明治的人間の罪をここまで抉りながら漱石は先生にも「私」にも遂に神の声を聞かせようとはしなかつた。既に『門』で試みていたことでありこの小説でも先生を追いついでその一歩手前まで進ませながら、作者もまたその矜持ゆえに（？）敢えて踏みとどまろうとしてゐる。だから、『こころ』の先生は自殺を願ひ、作者・漱石は先生の願ひ出をうけて彼を殺したのだともいえる。先生の遺書を受け取つた「私1」の課題は、先生の生と死とをどう批判的に乗り越えるかということではなければならない。そして手記を執筆する数年後の「私2」はこのことを理解してゐるはずである。しかし、彼はその手記を可能にしたものつまり彼が見据えてゐるはずの何かを明確には書いていない。このような文学のありようは日本の近現代には案外根深く、大江健三郎まで続いていると見ることができるよう思われる。